

5. 開発プログラムの概要

(1) 交流拠点「えぷろん」を核にしたにぎわいのある地域づくり <テーマⅠ、Ⅱ、Ⅲ>

賀野地区の各集落ごとに話し合いを重ねて策定された「集落づくり計画」をベースに1年以上検討し、今後の賀野地区の地域づくりの指針となる「富有の里づくり計画」を策定。同計画書を地区内全戸に配布し、賀野地区の将来展望について共通認識を図りました。

同計画の3つの柱の一つ農産物加工施設「えぷろん」は、活力とにぎわいのある地域づくりのための交流拠点として位置づけられました。

快適な空間創造のため、広場の芝生化やトイレ設置などハード整備も充実し、富有の里春祭り、青空市（毎月第2・第4日曜日）の開催、富有塾の開催など、地区内外の「ヒト」「モノ」「情報」の結節機能のある「郷の駅」への進化が始まりました。



広場の芝生化



農産物加工施設「えぷろん」



とことん「えぷろん」で語る会

(2) 他の広域的地域運営組織との連携による危機管理体制づくり <テーマⅠ、Ⅱ>

賀野地区と手間地区が町や県などと連動し、「御内谷線」存続運動を展開。通学や通勤で利用しやすいようなダイヤ改正・学生割引・バスへの自転車搭載などの社会実験は、バス事業者の協力のもと進められました。

日ノ丸バス「御内谷線」存続委員会は、両地区の振興協議会メンバーで構成。4世代同居世帯、子育て経験者や女性など、多様な意見を持った活動メンバーが参画し、活発な活動展開につなげました。

多くの地域課題を特定の組織と連携するだけでなく、特定課題に特化した効率的で機動力のある課題解決方法と言えます。マンパワーという地域における人的資源の有効な活用方法です。



自転車搭載バス(社会実験)

(3) 都市住民との交流による地域の魅力再発見 <テーマⅢ>

富有の里春まつり、就将公民館祭への相互出店、芋掘り交流などにより、自然・文化・伝統・地域活性化策など、それぞれの地域の良さや取り組みを学びました。

賀野地区では、交流活動を通じ、地域の魅力を再発見。地域の宝・地域の誇りを今後の活動展開に活用するきっかけとなりました。地域外から“外貨を獲得”するチャンスも生まれました。



富有の里春まつり



芋掘り交流

6. 成果と今後への展望

成果

■「えぷろん」が活動拠点へと飛躍

平成22年4月に町から指定管理を引き受け、地域住民にとってより身近になった「えぷろん」。「とことん『えぷろん』で語る会」では「えぷろん」周辺のにぎわいづくりをテーマにするなど、地域の活性化対策について熱く語る場としても利用されています。

■「富有塾」で人材発掘を進展

講演や実技指導による実利面のみならず、将来、賀野地区のリーダーになる“地域の宝”を見つけるという人材発掘の機会として地域住民の期待も高まっています。

■住民主体の「御内谷線」存続運動による自信の獲得

存続運動は、住民の力を結集して進められました。この成功体験が地域活動に関する大きな自信へとつながりました。

■都市部住民との無理のない範囲の交流

賀野地区と米子市就将公民館の交流イベントなどを通じ、「地域と地域のつながり」「住民と住民の心のつながり」ができました。無理のない範囲での活動が息の長い交流へとつながっています。

今後の展望

■地域課題の多面的な取り組みへ

御内谷線の存続運動は、住民主体で取り組んでいる大きな活動です。バスの社会実験は、地元住民の熱意にバス事業者が応える形で続けられてきました。

高校生の通学手段の確保を中心に行われてきた運動ですが、今後は、高齢者の移動手段の確保と相俟って生活交通全体の問題として捉えることも必要です。

また、賀野地区における唯一の小売店舗の撤退動向にも注意が必要です。地域課題に関するバランスの取れた活動が求められます。

■ハード設備充実にシンクロナイズした交流人口の増加

平成24年度には、「えぷろん」敷地内にユニットハウス2棟を設置するという動きもあります。これが実現すれば、とっとり花回廊に向かう沿道という有利な立地条件から、都市住民をターゲットとした「野菜・果樹・加工品の常設販売」「ファーストフードショップ」「地域紹介コーナー」など様々な拠点機能の付加も可能となります。

「外貨を稼ぐ場」だけでなく、そもそも地域住民にとって気楽に立ち寄ることができる憩いの場であることが望まれます。地域の生活基盤が揺るぎかねない現在の状況を打破し、今後の賀野地区をどのようにデザインしていくのか。「えぷろん」の交流拠点強化が、今後の地域運営の鍵を握っているとも言えそうです。

〈地元の方から一言！〉

南部町金田（賀野地区内）

住民 井塚照雄さん



あいみ富有の里地域振興協議会が発足して4年半が経過し、徐々に地域の中に浸透し始めています。

今までの行政に頼りがちな姿勢から脱却し、自分たちでやれることは自分たちでやってみようという様々な取り組みが行われてきました。こうした積み重ねが必ずや地域住民から支持され、いつの日か地域振興協議会の活動なしでは生活に支障が出るといった時代が来るような気がします。

高齢化社会が進む中、行政では目の届きにくいきめ細かい住民本位の活動がなされることを切に期待いたします。